

## 泰子さんの語り

本所に暮らしていた泰子さん一家は、父母、泰子さん、妹ふたりと祖母の六人暮らし。

終戦の前年に小学3年生以上が疎開に行くことになり、小学4年生の妹と泰子さんはそれぞれ千葉へと疎開に行った。子供たちは疎開が一体どういうものかわからずに遠足気分だったが、親たちは涙を流して子供たちを見送った。

疎開先はお寺で、疎開生活は防空壕づくりから始まった。当時千葉には飛行場があり、敵機が飛び交い機銃掃射で狙われるような危険な状態で、大変なところに来てしまったと感じた。貧しい食事、時々勉強のまねごとをするだけの楽しみのない日々。泰子さんは先生の目を盗んでポストに手紙を出しに行ったり、お芋をふかしてくれる地元の人に会いに行ったりしていてよく怒られた。当時、弟が生まれたばかりで母は手が離せず、父親は稼業が忙しく、疎開先に訪ねてきてくれなかったの、なんでうちは誰も来ないの！と感じていた。

お寺で子供達の世話をしに来ていたちょっと変わった若いお姉さんがいて、子供たちは懐いていた。ある日、彼女が三年生の慰問に行こうというので、数人の子供がついて行った。お姉さんは、帰り道は近道しようと言いだし、鉄道の線路を通って帰ることになったが、途中の鉄橋は奈落の底が見えるような恐ろしいものだった。結局子供たちは皆無事だったが、そのお姉さんはクビになって東京に返された。鉄橋からみた谷底はおそろしく、いまでも夢に見る。

1945年3月。受験のために6年生は東京に戻る。関東大震災の経験から、隅田川の近くは危ないと父親が判断し、自宅は本所から本郷へと引っ越していた。10日未明。本郷で東京大空襲に遭う。父親が不在だったため、空襲が鳴っても避難所には行かずに、一家は自宅の地下室にいた。ドーンという音に驚き、泰子さんが外に出ると、自宅の裏の家に爆弾が飛び込み、燃えていた。見上げれば紺碧の、突き抜けるような空。そこへB29の黒い機体が飛び交う。こういう日に空襲が来る。泰子さんは家業の重要書類が入ったリュックを背負い、家族を地下から外に出す。そのとき、本来自分たちが避難するはずだった料理教室に爆弾が入っていくのを見た。燃える地面を走り、坂を上って逃げる。ある学

校の地下室に入り、一晩を過ごす。次の日、千住の親戚まで歩く。焼け野原には犬の死体、馬の死体。

受験には合格したが、東京は危険だという父の判断で、一家は那須郡那須村に疎開。父は向島で自動車部品の卸しの家業を続けた。父親は仕事柄トラックの運転が得意で、非常時には消防車を頼まれるため戦争には行かずに済んだ。

田舎暮らしは東京での暮らしとは全く異なり、当時は靴を履いている人もいなかったため、泰子さんも裸足で走り回るようになった。都会から来た者への当たりは強く、名前ではなく「疎開さん」と呼ばれていた。泰子さんは、妊娠していた母親の代わりに、大人に混じって飛行場での勤労奉仕にも行った。

終戦もそこで迎えた。戦争に負けたために飛行場を燃やしてきたという村人が教えてくれた。ラジオがないので玉音放送のことは知らず、敗戦は翌日に知った。ほっとした。しかしその後、米軍が奥州街道を走ってやってきて、女は連れ去り、男は殺すという噂が流れた。本当にトラックがやってきた。泰子さんは弟を連れてそのトラックに近づく。米兵は綺麗な青い目をしていて、ちいさな弟の頭を撫でてくれたりチョコレートをくれたりして、優しくてかっこよかった。家に帰ると母親に怒られて、危ないからと言ってチョコレートは誰も食べなかった。

その後、父親が手配したトラックで東京へと戻り、向島でしばらく暮らす。防空壕あとは水たまりになってしまっていて、かわうそが住んでいた。

昭和 21 年に台東区に自宅を再建。まわりは瓦礫ばかりだった。

戦後の学校生活では、泰子さんは英語ができて優秀だった。「これからはアメリカとイギリスと仲良くしなければならぬから」と言って父が灯火管制のもとで英語を教えてくれていたのだ。もちろん、戦中は友達には秘密だったけれど。学校へは、ときに母親にもらった緑色のセーターに青いサングラス、ヒールを履いて通った。父親は先見の明のある人で、泰子さんを大学に進学させ、職にもつかせた。父親がつくった加瀬商店は泰子さんが継ぎ、いまもつづいている。

再話：瀬尾夏美